

ミキ先生の指

横山 邦治

ピッチリ指先が揃って伸び切っているというのが、ミキ先生の掌の特徴でした。

昭和二十六年三月の末日、新制高校を卒業した私たち広島県立可部高等学校の理科コースの男女併せて三十名ばかりの生徒たちは、卒業したその日にお別れパーティーをクラス担任であった武田学千先生のお宅で挙行することとなりました。(注一) 男女全員参加で、当時古市の繊維工場の女子寄宿舎跡(注二)の広島県可部女子専門学校の一室が、そのパーティー会場として設営されました。NHK朝ドラの「かりん」とは逆で女生徒さんが多いクラス構成で、女生徒さんたちは勿論おとなしい淑女たちの卵でしたので、一応肅々としたパーティーが終了して解散となった後、悪童連は学千先生に甘えてアルコール入りの乱痴気騒ぎで、その晩は徹夜でバツタリ。寝惚け眼の悪童連、翌朝女子専門学校の寄宿生に二階から声をかけたらしいのです。L字型の建物の中庭に洗面所があり、そこで早朝の洗顔をしていた女生徒さんに、眼を赤くしたむくつき男の子が声をかけたのです。びっくり仰天して部屋の中に遁走するという事態となつて、御当家の御主人様に大声叱呼されてしまったようなのです。私は少々飲み過ぎの酔眼朦朧、偏頭痛でウンウン唸っていたのですが、枕元で学友たちがボソ

ボソ相談している声でビックリ、眼が覚めました。どうでも御主人様のところにおわびに参上すべきであると議しているのです。そこで、またここで学千先生に仲介をお願いして、こういう時は何時も悪童連の代表となつていたシンチュウ君（注三）と一緒に、オズオズとおことわりに参上したのでした。

私どもは寄宿舎の二階の端っこの一室で雑魚寝をしていたと思うのですが、そこから中央にあつたかと思う小さな部屋へ参上、平身低頭しておわび申し上げたことでありました。この女子専門学校の校長さん夫妻がそこに居られました。御主人様はこの女子専門学校の校長さんではなくて、可部中学校の校長さんで、その奥さんが女子専門学校の校長さんのようでした。即ちこの方々が武田学千先生の御両親であり、その奥さんが武田ミキ先生だったのでした。

悪童連のいたずらを見かねて大声疾呼されたのは男先生、ふとんの中に半身を起こして対された奥さん（当時は脊椎カリエスの療養中で、ギブスとコルセットで病臥の身でありました。）の横でムズと坐しておられる男先生に最敬礼であります。ここでは大声叱呼ということはなく、男女の礼節を説いて十分に注意するよう説諭がありました。奥さんの方は終始ニコニコとしてあまり小言はありませんでした。いたずらつ子を笑つて見ているという感じでした。少し目がひっこんでいるという印象でしたが、色白で丸々とした顔で、身体もポツテリとした肥満体という感じ。病臥中で栄養専一というのと運動不足ということでそういう状態であつたと思うのですが、その時のミキ先生の指先がピタリと揃つて伸び切っているのが眼に焼き付きました。正座された姿勢も大変いい人でしたが、後で考えるとそれは脊椎カリエスでコルセットをしておられたせいかも知れないのですが、指先に

コルセットをされるわけではないのです。五本の指がピチンと揃って伸び切った状態、いわゆる気を付けの姿勢の時の指先の状態が、私の前にゆったり座っておられる奥さんの指先の状態なのです。ごく普通の奥さんなのですが、おわびに参上した悪童にあたたかい応待を下さった奥さんなのですが、その指先の状況が一種異様な印象を私に与えました。そこには異常な緊張感があったのです。

次にミキ先生にお目にかかったのは、火事見舞の時でした。可部駅裏の中原小学校跡の校舎（注四）が丸焼けになった時に参上したのです。焼残りの校舎の片隅の小さな三畳敷きぐらいの居室でお目にかかったのですが、顔が少し陽にやけて元気そうになっておられるという印象でしたが、指先の揃い方は以前のままでした。私は大学院に入ったばかりかどうかの時、前にお会いしてから六年目か7年目のことであつたと思います。

昭和三十三年から私は広島県可部女子高等学校の非常勤講師として勤務を始めたのですが、それが縁で武田学園が私の終の栖となつてしまふということになりました。やがて、常にミキ先生に近侍しているということになるので、日常生活から公的生活の中のあらゆる場面で、それは文部省に日参した列車の中でも、お役人と接する場でも、たといそれが病床の中ということであっても、その自然と身に付いたピツタリ伸び切った指先の姿には変化がありませんでした。疝症なぐらい潔癖な人で、爪を肉ギリギリまで切り揃える人でした。大きな断ち缺でクルリクルリと器用に切り揃えられるのですが、そこに家事科の名人芸の教育をしておられる片鱗を見る思いがしたのですが（注五）、いつもキチッと爪を切り揃えた指先が、ピツチリ揃って伸び切っているのでした。

事を成すには色々なことがあります、武田学園の創成という大事業を成就された先生にも、毀誉褒貶さまざま

な評がありました。しかしこの指先の印象が示すように、ミキ先生が事に当たって常に真摯であり真剣であったことだけは、万人の認める事実でした。緊張の連続であった明治の女の前向きな生き方が、習性となってこの指先に示されたのではなかったでしょうか、今にしてその指先の緊張感に煽られて私は武田学園の日々を生き生きたように思うのです。

十二月二十七日午前七時五十分に亡くなられたミキ先生は、日本人の常で、手は胸の前でやわらかく組み合わされて合掌の形になっていました。最後まで看護された武田学千・恵美子夫妻の心遣いの小さな数珠（注六）が手首に添えてありました、三途の川とやらを、自然体で渡ろうと、それはミキ先生の最後の願望のごとくに私は思われました。それはまた常に側にあつてミキ先生を支えられた武田学千先生御夫妻の祈りであり、数多くの教え子たちや武田学園の教職員と在学生たちの願いでありました。

（注一）石坂洋次郎の新聞連載小説『青い山脈』や『山のかなたへ』などが映画化されて評判になっていた時代、今のNHKの朝ドラ「かりん」の時代のことです。

（注二）井伏鱒二の『黒い雨』の舞台となったところか、ミキ先生は昭和二十三年に広島県可部女子専門学校を創設されたのですが、創設直後重篤の脊椎カリエスに倒れられ、可部の地に適当な土地建物が求められなくて、安古市の地に仮の校舎を求めて開学されていたのです。

（注三）竹本都夫君という学友ですが、何時も払い下げの進駐軍の服とか靴とかを身に着けていたので、当時はそれが大変恰好よかったです、シンチュウという渾名でした。酒好きで市役所勤務の公務員さんでしたが、早く亡くなりました。

(注四) 古市の校舎から、昭和二十九年に中原小学校(当時は可部中学校として使用中)跡を買収して移っているのです。

(注五) ミキ先生を語る時、その教育者としての偉大さを愛だとか誠だとか熱だとか抽象的な言葉で表現されることが多いのですが、私は教育方法の練達者であったことを顕賞したいと思います。女子専門学校における被服構成の授業を実際に見たことが数度あるのですが、実に解り易い授業でした。授業を受ける相手の能力を一人一人キチンと見て取って、そしてその能力に応じて臨機応変に理を明らかにしながらの授業でした。何故こうなるのかということを、相手に納得させる極めて説得力のある授業で、受講生の一人一人が極めて緊張して聞き入っていました。神業に近い教科教育法の実際を、私はそこに見た思いがしました。

(注六) 最初は武田学千先生が何時も持っておられる水晶の数珠だったのですが、恵美子夫人がミキ先生愛用の数珠(ミキ先生が追慕されて止まなかった勝太郎兄さん(現在の神原家の基盤作りをされた方)の後嗣神原秀夫氏(神原コンチェルンの創始者)からいただいたかかれたものとか)を想い出されて手に添えられ、最後はその数珠をもってミキ先生は旅立たれたのでした。